

第39号 2022.4.25 発行  
 発行者：株式会社協進印刷  
 編集者：JO 編集委員会

# 課題解決はもう古い！ 地域の「課題発掘」パートナーに

PrintNext2022 運営委員長

青木 允さん



青樹印刷株式会社（東京都中央区）代表取締役。  
 精密機械メーカーでシステムエンジニアとして従事したのち、2008年に青樹印刷株式会社入社。2013年より現職。  
 印刷工業組合では、2016年・2017年 東京青年印刷人協議会議長  
 2018年・2019年 全国青年印刷人協議会議長、PrintNext  
 2022 運営委員長。  
 家族は妻と長男長女。趣味はフットサル。  
<https://print-next2022.jp/>

江森：PrintNextの第1回は印刷関連の青年4団体が集う「Print4」として2004年に東京で開催されました。かつての印刷業は日本の情報インフラを担うとても大きな産業で、それだけに団体の数も多く、それらの間で勢力争いのようなことが行われていたこともあったのですが、産業としての成長に翳りが見えてきたあの当時、せめて若手だけでも団体の垣根を越えて集まろうということが始まったと聞いています。不肖この私も通算5回目のPrintNext2012で運営委員長を務めさせていただきましたが、青木さんは10回目の節目となるPrintNext2022の運営委員長を務められました。10回目ということで何か意識したことはあったのですか。

青木：まさにいま江森さんがおっしゃったように、第1回を開催された先輩方がどんな思いだったのかということをまずは確認しようと思ひ、創設メンバーのひとりである神戸の岸さんを訪ねてお話を伺いました。江森：岸さんというと、当時は日本グラフィックサービス工業会（JaGra）の青年部Space-21の代表幹事でしたね。青木：はい。当時の座談会の記録なども見せていただきましたが、今のままじゃマズイという危機感を持って、団体の垣根を越えて取り組もうという思いを、今の自分たちと同じように当時の先輩方も持って行動に移したということが確認できました。江森：なるほど、でもそれって逆にいうとこの20年間あんまり変わってないということ？（笑）

青木：そうじゃないんです！（笑）思いは同じなんですけど、当時と今とは大きく違うことがひとつあって、それは当時は実際に「壁があった」ということなんです。でも今我々は団体の垣根を意識することなどなく、仕事でもプライベートでも自由に交流できているじゃないですか。僕はそれは確実にPrintNextの成果だと思っています。だからこそ、この環境というのには当たり前なことではなく、いろいろな課題を先輩方が乗り越えて今があるというところを、全国の青年部の人たちに伝えたいと思っていました。

青木：ただでさえ右肩下がりなのにコロナで社会全体が停滞していますし、原材料の高騰なども重なって将来に対して不安に思っている人は多いですね。でもだからこそ何かしなきゃという思いも強く感じました。その危機感というのは今回の各ブロックの取り組みにも表れていたと思います。江森：確かに取り組みのクオリティはとてつもなく高いと感じました。この手の活動ってどうしても同好会ノリになって、楽しかったね、よかったね、で終わってしまうものなのですが、後の活動につながっているものも数多くあって、みんなの本気度が伝わってきました。印刷業界以外の方にも是非見ていただきたいですね。青木：そうですね、是非ホームページを見

ていただきたいですし、4月29日に331 ArtsChiyodaで開催する「TOKO市場」にも来ていただきたいです。もうひとつ危機感として感じたのは、次世代を担う人材が業界に入ってきて来ないということですね。

**江森**：印刷業界に限ったことではないでしょうが、若者に不人気というのは単なる人手不足というのとはまた違った恐怖感がありますね。

**青木**：そもそも学生が仕事を選ぶ枠の中に我々が入っているのか？というのは深刻な課題なんですよ。そこで今回はできるだけ学生さんに関わってもらおうということで、学生を対象にしたロゴマークコンテストや、工場見学ツアーの開催、学生記者によるフリーペーパー発行など、若者に業界の魅力を感じてもらえる企画をたくさん用意しました。

**江森**：フリーペーパー読みましたよ。学生の反応はどうでしたか？



**青木**：若い人たちはメディアアクリエーションには興味があるのですが、それを印刷会社がどこまで担っているのかという情報が少なすぎるんですよ。そういう意味では印刷会社の仕事の幅の広さを見せられたのはとても有意義なことだったと思います。何より今回参加してくれた学生さんのうち、2名が実際にメンバーの会社に就職したんですよ！これにはシビれましたね。

**江森**：すごい！Print Nextが始まって以来の快挙じゃない？実際印刷会社の仕事はおもしろいですかね。それをいかに伝えられるか、そういう場を設けられるかということは、業界全体の課題ですね。他に特筆すべきことはありましたか？

**青木**：関東甲信越静岡ブロックがまさに僕がやって欲しかったことを具現化してくれた内容で、とてもうれしかったですね。

**江森**：長野の高山村のやつね。ワイン産地であることを地元の子供に伝えるために、収穫体験をした子供が20歳になったときに、オリジナルラベルのワインをプレゼントするという企画でしたね。

**青木**：数年前から全印工連でもソリューション・プロバイダーへの進化を提唱していますが、実は課題解決プレイヤーって結構出てきていて、すでに価格競争が始まっていると思ってるんです。だから今回は課題解決ではなく「課題発掘」をして欲しいということを全国に呼びかけてきました。

舞台になった高山村は全国有数の高級ワイン用ぶどうの産地なんですけど、村外のワイナリーに卸しているの、地元の人は自分の村がそんなにすごいワイン用ぶどうの産地だなんてほとんど知らなくて、それこ

そ次世代の担い手づくりという観点からも、地元行政はじめ課題感はあるものの、どうしていいかわからない状態だったんだそうです。そこに目を付けた長野のメンバーが、足しげく高山村に通って地元の信頼を獲得しながら、地元産のワインを村からの20歳のプレゼントにするというストーリーを完成させたんです。相手は農家の協同組合のおじいちゃんたちなので、とても苦労したそうなんですが、地元の人にも気づいていないリソースを活用することで、関わったすべての人たちにとってWin Winな取り組みになったことはとても素晴らしいかなと思います。

**江森**：なるほど、当日1回の発表だとよくわからないけど、これぐらい丁寧に説明してもらえるとよくわかりますね(笑)。たぶん「課題発掘」してくれというリクエストがよかったですね。課題解決って言うっちゃうと「課題はありませんか？」って聞きに行っちゃうでしょ。それで「はい、課題はこれこれです」ってすらすら出てくるようなら、もうとっくに解決してるだろってことだよ。当の本人もそれが課題かどうかかわかっていないところに入っていないかなとね。

**青木**：印刷会社はそこをやっていくべきだと思ってるんですよ。それぞれの地域で。長年の信頼関係もありますし、チラシを作りたいんだけどという相談ではなく、こういうことしたいんだけど一緒に考えてもらえませんか？と頼まれるような存在になつていかなければならないと思っています。

**江森**：青木さんが考えるこれからの印刷産業界ビジョンというのはどういふものですか。

**青木**：いきなりすごい球投げてきますね！(笑)。運営委員長挨拶でも言ったのですが、私は世間の人々が印刷IIプリントと思い込んでしまったのは、マイクロソフトがWindowsの“PRINT”というコマンドを“印刷”と翻訳したからじゃないかと疑ってるんですよ。たぶん昔は印刷屋さんってもっと幅広い仕事をする人って認識されてたはずで、それがいつの間にかプリントだけをする人というふうになり、世間の人々も我々業界人も思い込んでしまったのではないのでしょうか。実は今回コマンドを翻訳した“犯人”を突き止めようとマイクロソフトに問い合わせしてたんですけど、とうとうつながることができませんでした。

**江森**：それ、おもしろいね！是非ライフワークとして続けてもらって、犯人見つけたらドキュメンタリー動画を公開してください(笑)。印刷会社がすでにいろいろな仕事を始めていることは事実であり、そういう意味で従来の枠組みではもはや印刷会社と呼ぶべきなのかどうか迷うような会社もたくさんあります。となるとどうしても組合脱退とか組合解体とかいう方向に議論が向かうわけですが、私は逆に、例えば別の業界団体と合併するなどして組合を大きくできないかと考えています。政府との関係ひとつとってもスケールメリットというのは確実にあるわけで、いわゆる“プリント”を生業としていかなかったとしても、スケールメリットを使うときは「印刷会社です」と平然と言い切れる。そんなしたたかさを持つことも、これからの時代必要なことなんじゃないかと思えます。今後の青木さんのリーダーシップに大いに期待しています。

# 毎日ラジオ、深夜に YouTube、 週末レコード、たまにフェス

竹見正一

🕒 4月1日 / 金曜日 / 8時

昨夜からの大雨がやんだ朝、デスクに大きめの封筒が届いていた。送り主は小学校の先生。開封すると生徒一人ひとりからのお礼カードが入っていた。例年いくつかの学校でキャリア教育のお手伝いをしており、3月中旬頃からこのような嬉しい知らせが届く。「将来デザインの仕事がしたい」「自分で作ったポスターが街に貼ってあって嬉しかった」など、こちらが元気をもらう言葉ばかり。「応援する人になれて、楽しかった」お！彼か。あなたは何かをしている人ですか、なんて、唐突に聞いてくるちょっとユニークな彼。グループワークでのポスター作りは全くやる気がなく、それなら、と、彼には作っているみんなを応援する任務を与えた。アイデアに煮詰まっていたら応援、教室がうるさくなったら応援、先生が下を向いていたら応援、みたいに。

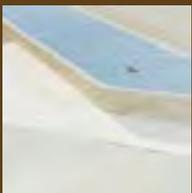
全てのカードを読み終え、なぜか、さらば青春の光のコント、“予備校”を思い出した。そうか、鼓舞やこぶ！彼にあなたは何かをしている人って聞かれた時の答にモヤモヤしていたけれど、これからは鼓舞する人だよって言おう。ここ数ヶ月のモヤが取れて一気に澄み切った。



“紙ひこうきをとばし続けることもあるさ”  
曲：WEATHER REPORT (宇宙 日本 世田谷)  
フィッシュマンズ

🕒 4月14日 / 木曜日 / 17時

朝から鳴り響く携帯電話。納品後の誤字発覚、材料値上げ、特殊本の制作相談、撮影の入り時間大幅変更、新規プロジェクトへの誘い…。こんな日は時間の感覚が薄れてしまい、サービスエリアの一角、開けた緑地でふと見上げた空はすでに茜色。グイーッと全身を伸ばし、焦点を合わせずに空を見続ける。ほんの30秒ほど頭を空っぽにしてから、売店でアイスコーヒーを買い、車に戻ってPCを開く。画面左上にピコピコとメールが積み上げられる。件名に【お礼・ご挨拶】を見つけ、恐る恐る開封する。この時期、一定数の方が異動となるため、こんなメールを少なからずいただく。「心残りが大きく、私も動揺しております」ああ、やはり。「私にとりまして楽しみになっていた企画なので、本当に残念でなりません」と読み上げて、PCをたたむ。ヒットチューンをループするFMを消し、ハンドルを抱きかかえて目を閉じる。思い出すのは、いろんな壁を破って一緒に邁進した去年のこと。あなただから頑張れたのですよーって嘆く。官と民。近くて遠くて、それもまた実は甘美なのでは、と自分を諭す夕暮れ。



“つつがなく通り過ぐ、  
こその月日も夜空に溶けて”  
曲：すべからく通り雨 (グロクムズ)  
グロクムズ

## プラ汚染防止へ国際約束。法的拘束力の可能性も。

今年3月に開催された国連環境総会（UNEA）において、プラスチック汚染防止のための法的拘束力のある国際約束の枠組みを作ることが決まりました。2022

年後半に政府間交渉委員会を立ち上げ、2024年末をめどに作業を完了させる予定です。この国際約束には「国別行動計画の策定・実施・更新」「国際約束の実施状況と実効性に関する評価」「海洋環境におけるプラスチック汚染を減らすための、国内外の協調的な取り組みの促進」などが盛り込まれることが、今回の総会で決議されました。この枠組みが発効すれば、パリ協定の

ようなプラスチック汚染防止に関する国際条約が制定される可能性もあり、国はもろん企業にも少なからず影響が出ることは間違いないと思われます。

日本でも、この4月から「プラスチック資源循環法」が施行され、プラスチック製品の設計・製造から販売、使用、リサイクル、廃棄までプラスチックに関わるすべての事業者、自治体、消費者が相互連携によってプラスチックの資源循環の相乗効果を高めることが法制化されました。事業者には、①プラスチック廃棄物の排出の抑制、再資源化に資する環境配慮設計②ワンウェイプ

ラスチック（一度だけ使用した後に廃棄することが想定されるプラスチック製品）使用の合理化③プラスチック廃棄物の分別収集、自主回収、再資源化などが求められており、すでに飲料メーカーではリサイクルペットボトルの使用が拡大しているほか、ファストフードでも、プラスチック製カップラシーを、店内用は金属製、持ち帰り用には生分解性プラスチックに変更するなどの動きが出ています。

当社でも脱プラスチックに貢献する商品として一昨年より「紙製クリアファイル」の販売を開始し好評を得ています。地球温

暖化防止だけでなく、海洋汚染や生物多様性も視野に入れたサーキュラーエコノミーのビジネスモデルを構築していくことが、企業にとっては急務となっております。

紙製クリアファイルの詳細はこちらから↓



# あなたの知らない ふおんとのはなし

第九話 文字セットと文字コード

ひと昔前には、メールを開いたら\*@a?/!xj%¥みたいな宇宙語が出てきたなんてことがよくありました。この文字化けの原因になるのが文字セットや文字コードです。

世界各国にはいろいろな文字があるので、コンピュータでこれらを表示させるために一定のルールを作ることが必要になります。そこで、どんな文字をどういう順番で収録するかを定めた文字の集合体「文字セット（文字集合）（CSS）」という概念が生まれました。世界で最初に作られた文字セットは米国規格協会ANSIが作ったASCIIという文字セットです。日本では1969年にJISX0201という文字セットが作られました。当時は半角英数字と半角カナだけしか扱いませんでした。

文字セットはただの文字の集合体なので、これをコンピュータで扱える01のコードにしたものを「文字コード」、その変換（エンコーディング）方式のことを「符号化方式（CES）」といいます。有名なものとしてはShift-JISやUTF-8などがあります。冒頭の文字化けは、メールソフトで使っている符号化方式が、送信側と受信側で異なることによって発生する現象です。最近あまり見なくなったのは、メールソフトが符号化方式の違いを自動的に修正してくれるようになったことと、世界中で使われる文字セットや文字コードの種類が絞られてきているためと考えられます。

現在日本ではJISX0208やJISX0213という文字セットが公的なものとして普及していますが、JIS規格を拡張する形でAdobe社の「Adobe-Japan1 (A-1J)」やマイクロソフト社の「メイリオ文字セット」など企業や団体ごとに定めているものもあります。

印刷の現場では、このコラムでも何度かとりあげたように、氏名などで使われる字体・字形が微妙に異なる漢字を扱えるようにするために、「A1J」を使うのが一般的になっており、A1J0から末尾の番号が大きくなるに従って収録文字数が増え、最新のA1J7では2万3060字が収録されています。

## 2021年度はまつ子未来カンパニープロジェクト報告

子どもたちが未来を生き抜く力をつけるために、学校と地域が一丸となって取り組む横浜のキャリア教育「はまつ子未来カンパニープロジェクト」（横浜市教育委員会）。6年目となる2021年度も、市内の3小学校と様々な課題解決に挑みました。

羽沢小学校では、学校の前に広がるキャベツ畑に着目、このキャベツについて調べようということになりました。農家にヒアリングすると、美味しいのに横浜の人にもそれほど知られていない、とのこと。早速種植えから収穫までを体験、キャベツ即売会の企画開催、町外へも周知するためのポスター制作、地域と区役所への掲載活動と、3年生とは思えないがんばりで、全てのアイデアを実現しました。地域の掲示板には、一人ひとり違うデザインで制作したポスターが掲載され、「次はどんなキャベツの紹介かな？」と散歩の距離が伸びた」、という地域の方の声もありました。



大口台小学校では、こちらも3年生が大口の町の魅力を伝えるプロジェクトでパンフレットを作成。大口台小伝統の商店街での「お店体験」がコロナ禍で中止になる中、地域のことを学ぶ学習を楽しく意味のあるものにしようと、子どもたちと担任の先生が一緒に考えた企画です。

子どもたちが苦勞を重ねて作ったパンフレットは修了式3日前にようやく完成。がんばった子どもたちに協進印刷からのプレゼントとして名前



入りの「金メダルカード」をプレゼントしました。裏面は、協進印刷の社員に当ても相談できる「相談できる券」。本当に相談に来るかどうかは別にして、地域に味方になってくれる大人がいるという安心感を育むことができればとの願いを込めました。



## よこはまグッドバランス賞 5回継続賞受賞

横浜市認定制度「よこはまグッドバランス賞」。女性の活躍やワーク・ライフ・バランスを推進するため、誰もが働きやすい職場環境づくりを積極的に進める市内中小企業等を「よこはまグッドバランス賞」として認定しています。

当社では2015年の最初の認定から今回は「5回継続賞」の受賞。認定当初は「女性」が主役でしたが、いまではジェンダー平等、LGBT、ノンバイナリーなど7年で環境も大きく変化していると感じます。身近なことからコツコツと、誰もが働きやすい職場環境を目指していきたいと思えます。



JO（ジェイ・オー）2022年4月号（第39号）  
 発行者：株式会社協進印刷  
 横浜市神奈川区大石仲町108番地  
 TEL：045（4331）6611  
 FAX：0450（3730）6273  
 URL：http://www.kyoshin-print.co.jp

